

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 國學院大學のコントロールクラス40年の変遷

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 海老沢, 礼司, 伊藤, 英之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001211">https://doi.org/10.57529/00001211</a>

# 國學院大學のコントロールクラス40年の変遷

海老沢 礼司 伊藤 英之

The Change of 40 Years in “Control Class” of Kokugakuin University

Ebisawa Reiji, Itoh Hideyuki

キーワード：体育実技、スポーツ・身体文化Ⅰ、コントロールクラス、運動制限クラス

## はじめに

本学では昭和38年にⅠ部法学部が、同40年にⅡ部法学部が設置された。そして昭和41年、政経学部が経済学部となり、ここにⅠ・Ⅱ部とも文・法・経の三学部からなる文科系総合大学の形が整い、大学の設置基準を満たすため、八王子分校が開校（授業は昭和42年度より開始）した。昭和41年、田園都市線が開通し、昭和42年、体育実技はⅠ部1年次が神奈川グランドと八王子分校にて球技中心、2年次は渋谷本校にて男子格技系種目（当時の武道の呼称）女子は球技中心、Ⅱ部も男子格技系種目中心、女子は球技中心の授業が行われた。この形式は八王子分校終了の昭和59年度まで継続された。コントロールクラス（体育実技の運動制限クラス）は昭和46年度まで土曜3限（Ⅰ部）と6限（Ⅱ部）の2コマであったが、昭和47年以降、Ⅱ部開講はない。今回は記録記載がある昭和45年から平成21年、40年間の國學院大學体育実技、スポーツ・身体文化Ⅰのコントロールクラスと受講者が時代とともにどのように変容したか考察してみた。

## 1. コントロールクラスの変遷

### 1) 指導体制（表1）

①昭和46年までは諸富嘉男助教授（昭和47年日体大に転任）がⅠ・Ⅱ部の2コマを担当し、内容は殆どが保健理論講義であり、実技は年間3～4回であった。昭和47年からは吉田健一助教授が担当し、土曜3限の1コマになった。「コントロールクラスでも、医師に通学を許可されている以上、実技を行うべきである」を基に、この年より、すべての受講者がからだを動かすようになった。授業は3レベルのグループ、A（量の制限）・B（質の制限）・C（量・質の制限）に分け、各グループに助手が付き、その日のメニューを行うことを基本とした。

また特殊な場合（半身不随などで、からだがあまく動かない）はマンツーマン指導となった。この方法は現在でも利用されている。担当教員は昭和50～52年は3人、53～56年は2人で行われた。

②昭和60年、Ⅰ部1年次は、すべて新石川キャンパスで体育実技を受講することになった。

表1 コントロールクラスの変遷

年度	I部 受講者数	II部 受講者数	受講者 総数	Cクラス 受講者数	Cクラス コマ数	Cクラス 担当者数	年度	I部 受講者数	II部 受講者数	受講者 総数	Cクラス 受講者数	Cクラス コマ数	Cクラス 担当者数
S45	4776	1645	6421	36	2	2	H4	3845	1650	5495	34	2	2
S46	4770	2525	7295	37	2	2	H5	3539	1280	4819	46	2	2
S47	4823	1697	6520	54	1	1	H6	3340	1175	4515	48	2	2
S48	4920	1687	6607	55	1	1	H7	3265	1277	4542	41	2	2
S49	4662	1690	6352	58	1	1	H8	2108	876	2987	35	2	2
S50	4666	1734	6400	43	3	3	H9	1932	649	2578	34	2	2
S51	4700	1723	6423	52	3	3	H10	1729	772	2501	20	2	2
S52	4508	1634	6145	43	3	3	H11	1912	699	2611	29	2	2
S53	4432	1766	6198	42	2	2	H12	1872	674	2546	25	2	2
S54	4580	1847	6427	39	2	2	H13	2209	536	2745	32	2	2
S55	4179	1844	6023	24	2	2	H14	2315	523	2838	27	2	2
S56	4131	1839	5970	27	2	2	H15	1871	570	2441	20	2	2
S57	4123	1828	5951	18	1	1	H16	1965	558	2523	25	2	2
S58	3856	1718	5574	23	1	1	H17	2167	404	2571	8	2	2
S59	3697	1650	5347	26	1	1	H18A	2192	353	2545	18	2	2
S60	3579	1630	5209	22	1	1	H18B	1984	348	2332	4	2	2
S61	3584	1666	5250	26	2	2	H19A	2087	316	2403	20	2	2
S62	3935	1658	5593	44	2	2	H19B	2110	322	2432	4	2	2
S63	4121	1690	5811	46	2	2	H20A	2214	228	2442	14	1	1
H1	3880	1677	5557	39	2	2	H20B	2236	235	2471	21	1	1
H2	3614	1742	5356	46	2	2	H21A	1026	201	1227	29	2	2
H3	3704	1328	5032	40	2	2	H21B	1035	211	1246	21	2	2

この年まで2年次は渋谷本校だが、「格技系種目」は「武道系種目」と変更された。コントロールクラスは渋谷本校、土曜3限、担当教員2人となった。

③昭和61年、I部1・2年次全員週1日新石川キャンパスで、体育実技のほか語学・一般教養科目・専門科目などを受講した。基本である2年次「武道系種目」、1年次「球技系種目」履修は継続されていた。これによりコントロールクラスは新石川キャンパス1コマ、渋谷本校の1コマ開講となった。

④平成3年「新石川キャンパス」は「たまプラーザキャンパス」と命名され、初代キャンパス長に保健体育研究室の吉田健一教授が就任した。また「渋谷本校」も「渋谷キャンパス」と名称変更をした。

⑤平成7年、1年次体育実技は「スポーツ・身体文化I（通年2単位）」となり、2年次体育実技必修はこの年で終了した。

⑥平成8年、「中国文学科」、「外国語文化学科」、「経済ネットワーク学科」、「II部産業消費情報学科」の設置により相模原キャンパスが開校、「スポーツ・身体文化I」は月、火、木、金曜日の1、3限の開講となった。（1限受講学生は、たまプラーザキャンパス3限受講可能、3限受講学生は、たまプラーザキャンパス1、2限受講可能としたため）。相模原キャンパスの授業は、平成12年まで行われた。コントロールクラスは、たまプラーザキャンパス1コマ、

渋谷キャンパス1コマの開講となった。

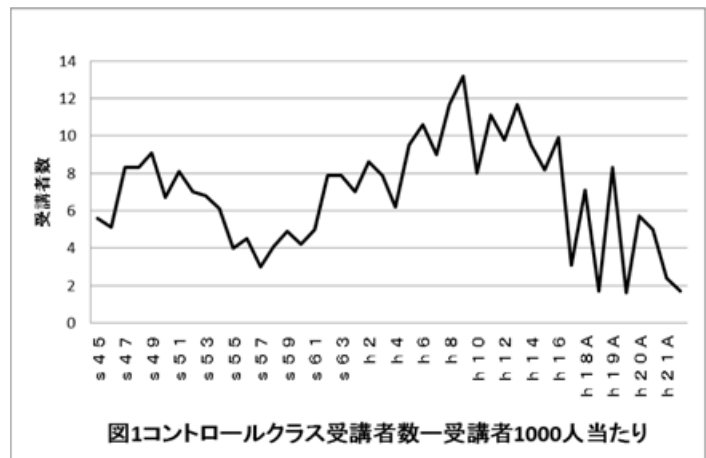
⑦平成14年、「神道文化学部神道文化学科」が設置され、法学部、経済学部と共に社会人入試が開始した。そのため、社会人コントロールクラス1コマが平成19年まで増設された（コントロールクラスは渋谷キャンパス2コマ）。

⑧平成18年、「スポーツ・身体文化Ⅰ」は semester 制になり、前期をA、後期をBとした。コントロールクラスは渋谷2コマ、担当教員2人で担当した。

⑨平成21年、たまプラーザキャンパスに「人間開発学部」が新設され、コントロールクラスは渋谷キャンパスに1コマ、たまプラーザキャンパスに1コマ設置された。各コマに助手が付き、その日のメニューを行うことを基本とした。

## 2) コントロールクラス受講者の変動（表1）

①体育実技、スポーツ・身体文化の総受講者数が最も多い時期は昭和45年から55年の6000人台であり、コントロールクラスの受講者数も50人台が何年かあった。コントロールクラスの受講者数は昭和55年から61年は20人台と減少したが、昭和61年1、2年次は新石川キャンパスでの受講となると、



昭和62年より30人から40人台に増加した。平成8年より2年次の体育実技の必修はなくなり、「スポーツ・身体文化Ⅰ（平成7年、1年次の体育実技の名称変更）」の履修は、受講者数が2000人台に減少した。以後、コントロールクラスの受講者数は30人未満となった。平成18、19年の後期が極端に少数になっていたが、これは主に前期、スポーツの怪我や交通事故で受講した者が後期、普通クラスへ移動した結果である。平成21年、法学部、経済学部が「スポーツ・身体文化Ⅰ」を選択科目に変更したため、受講者数は更に減少し、1200人台となった。

②受講者数1000人当りに換算したコントロールクラス受講者数は図1のとおりである。平成8年から2年次の必修がなくなったが、平成16年まで1000人当たり10人前後の受講者数であった。

これは外国語文化学科、中国文化学科、神道文化学部の新設と、神道文化学部、法学部、経済学部の社会人入試が行われるようになり、当時、出来るだけコントロールクラス受講を勧めた経緯があったからである。

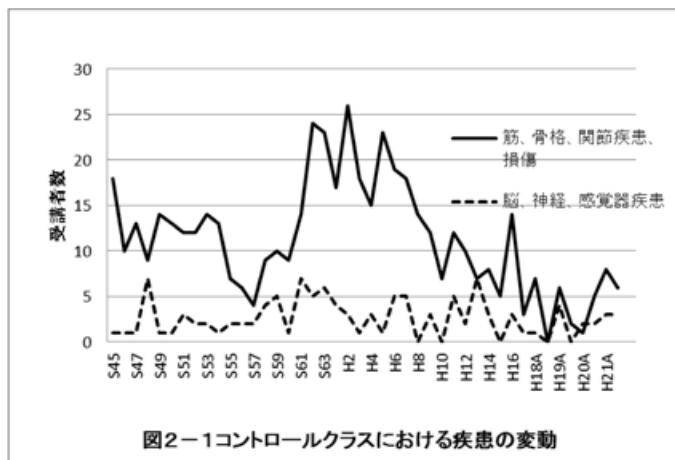
## 2. コントロールクラス受講者の疾患の変動

### 1) 筋、骨格、関節疾患・損傷 (図2-1)

スポーツ活動、交通事故による骨折、関節障害、椎間板ヘルニアなどが毎年最も多い。昭和40~50年代は小児麻痺、先天性股関節脱臼が多く、特に昭和62年から平成7年ごろは椎間板ヘルニア、骨折、膝の怪我などが目立っていた。年平均受講者数は12.43人と非常に多かった。

### 2) 脳、神経、感覚器疾患 (図2-1)

受講者0人の年はなく、多い年は7人(昭和48、61年、平成13年)、網膜剥離、突発性難聴、先天性緑内障、自律神経失調症などで、年平均2.23人であった。

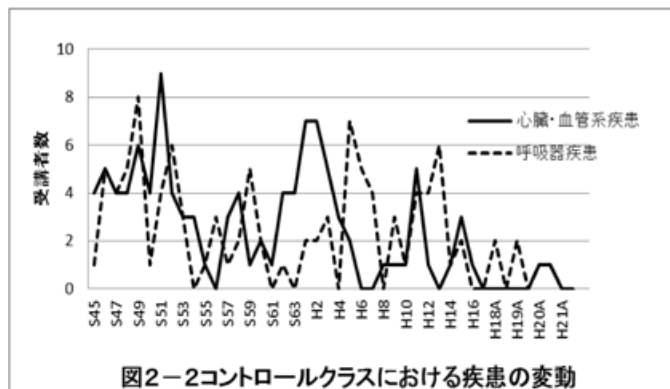


### 3) 心臓・血管系疾患 (図2-2)

心臓病、血管系の病気は平成16年以降には減少しているが、それまでは年5人前後が受講し、年平均2.50人であった。

### 4) 呼吸器疾患 (図2-2)

「気管支喘息」「自然気胸・術後」「慢性気管支炎」は数人受講の年が5回あり、年平均2.25人であった。

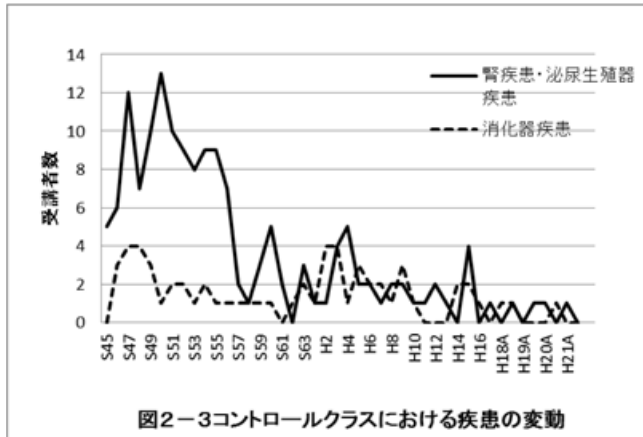


5) 腎疾患・泌尿生殖器疾患 (図2-3)

昭和45年から56年の受講者が多く、主な病気は慢性腎炎であった。

6) 消化器疾患 (図2-3)

毎年、少数ではあるが、胃潰瘍、十二指腸潰瘍、慢性胃炎で受講されていた。

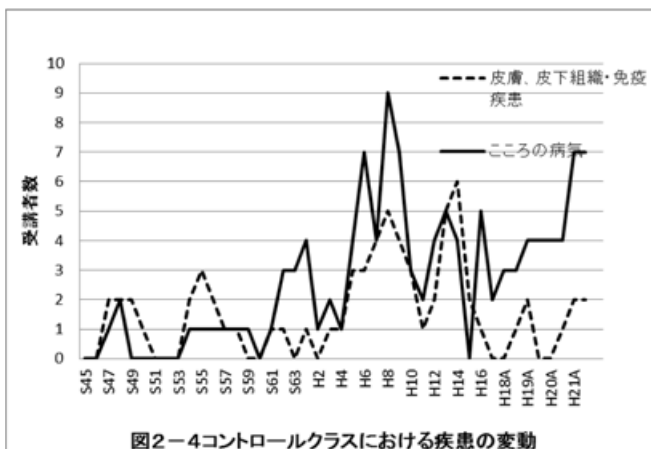


7) 皮膚、皮下組織・免疫疾患 (図2-4)

前半(昭和45年から平成4年)、受講者は少数であったが、平成5年頃から増加傾向になり、平成13、14年は、それぞれ3、4人の受講、年平均1.40人であった。アレルギー皮膚炎、アトピー性皮膚炎、エリテマトーデスが主な病気である。

8) こころの病気 (図2-4)

「神経衰弱」、「神経衰弱症」の病名は、昭和50年代ごろまでは、よく使われたが「自律神経失調症」や「神経症」と区別が曖昧であるため、現在では病名としては殆ど使用されていないが、病名は医師の判断で使用されるため、今回は「心の病」の範疇として、以下の病名を集計してみた。



「神経衰弱症」、「心気症」、「脅迫神経症」、「神経不安症」、「神経症」、「対人恐怖症」、「うつ病」、「うつ状態」、「対人緊張」、「神経性無食欲症」、「不安障害」、「パニック障害」、「神経衰弱状態」、「パーソナリティ障害」、「アスペルガー症候群」、「適応障害」、「自律神経失調症」。

「心の病」は昭和62年より増加しており、特に平成6年に、7人、平成8年に、9人、平成9年、平成21年に、7人であり、病名も多種で、「うつ病」、「不安障害」、「アスペルガー症候群」、「パーソナリティ障害」、「パニック障害」、「対人恐怖症」などが受講していた。

「心の病」の受講者は、平成6年から12年の20年間のべ84人、年平均4.20人と、近年、益々増加傾向にある。

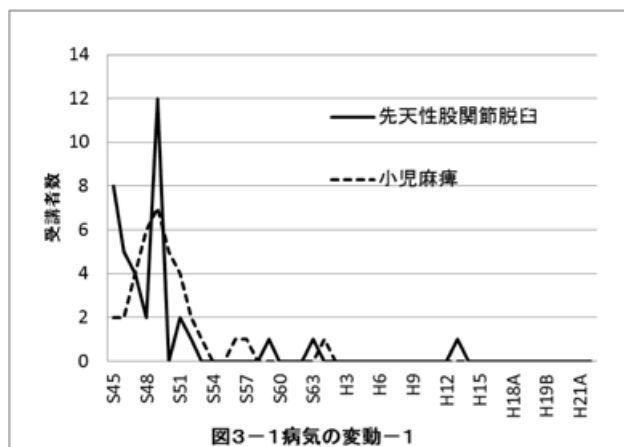
### 3. コントロールクラス受講者の主な病気の変動

#### 1) 先天性股関節脱臼 (図3-1)

図3-1のとおり昭和49年、12人をピークに昭和45年から49年まで5年間では、計35人、年平均7.00人と非常に多かったが、その後は、殆ど受講していない。

#### 2) 小児麻痺 (図3-1)

先天性股関節脱臼同様、昭和45年から53年の9年間はこのべ33人、昭和49年7人をピークに年平均3.67人だが、その後の小児麻痺の受講者は昭和56年、57年、平成元年に1人のみであった。



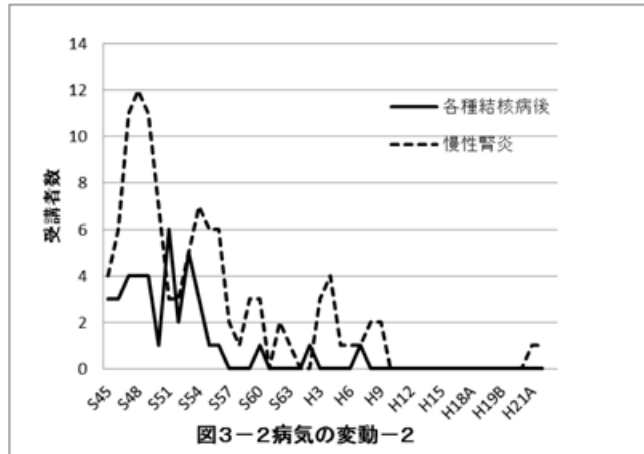
#### 3) 各種結核病後 (図3-2)

結核は昭和46年国民衛生の動向によると、昭和45年の罹患率は人口10万人に対し172.3人、罹患患者17万8000人であった。平成21年度厚生労働省の結核登録者情報調査(概況)によると罹患率は人口10万人に対し、19.0人、4万4000人の患者が発生しているが、昭和45年の約11%と減少はしている。コントロールクラスでは昭和45年から56年まで、のべ37人、年平均3.10人、昭和51年6人をピークに昭和57年以降は昭和60年、平成2年、平成7年それぞれ1人のみの受講者数であった。



4) 慢性腎炎 (図3-2)

平成9年以降は平成21年に1人受講しただけであり、昭和47年11人、48年12人、49年11人がピークになっていた。平成10年からは受講者は0人であったが、平成21年1人受講した。

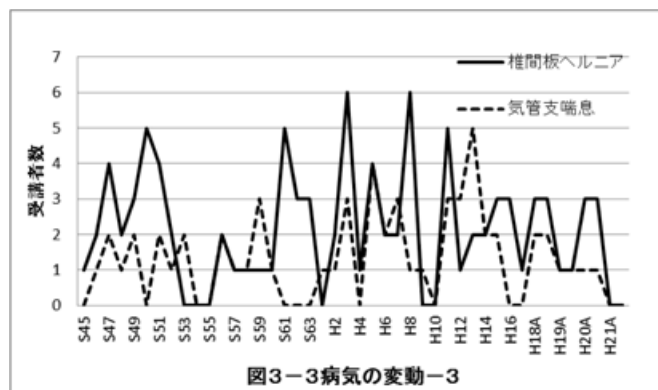


5) 椎間板ヘルニア (図3-3)

昭和45年からコントロールクラスに毎年のように受講者があるのが、この椎間板ヘルニアであり、40年間で、受講者0人の年はわずか8回のみ、年平均2.34人受講していた。

6) 気管支喘息 (図3-3)

椎間板ヘルニア同様、平均して受講者がいた。受講者0人の年は13回、年平均1.45人受講していた。



まとめ

コントロールクラスは、主に渋谷キャンパス土曜3限で行われてきた。40年間の前半は1、2年次の体育実技は必修であり、受講者数は6000人台、コントロールクラスの受講者数も50~60人台



と非常に多かった。昭和50年～52年は流石に3コマ開講、教員3人態勢で行われた。

受講者数の最も多い病気は「筋、骨格、関節疾患、損傷」、所謂、スポーツ活動や交通事故が原因の受講者であり、40年間の年平均は12.43人であった。

また、殆ど毎年受講の病名は「脳、神経、感覚器疾患」(年平均2.23人)、「心臓・血管系疾患」(年平均2.50人)、「呼吸器疾患」(年平均2.25人)などであった。

主な病気の特徴では、前半型(調査した40年間の前期に受講者が多い)は「先天性股関節脱臼」が昭和45年～49年の年平均7.00人、「小児麻痺」は昭和45年～53年にのべ33人、年平均3.67人、「各種結核病後」は昭和45年～56年にのべ37人、年平均3.10人、「慢性腎炎」は昭和47年～49年がピークであった。これらは後半殆ど受講者はなかった。

40年間毎年のように受講のあった病気は「椎間板ヘルニア」(年平均2.35人)と「気管支喘息」(年平均1.45人)であった。

後半型(調査した40年間の後期に受講者が多い)としては、近年コントロールクラスの特徴でもある「心の病」受講者数の増加である。事実、平成6年から21年、年平均4.20人である。また実技を履修していない法学部、経済学部や2年生以上の「心の病」を患っている学生は相当数想定され、これからも増加することは当然予想される。大学として、彼らに対するきめ細かな対応を医療担当者のみでなく、すべての科目担当者が考慮しなければならない。

#### 参考文献

- 1) 國學院大學体育研究室：國學院大學体育小史・國學院大學体育研究室紀要：第10巻1978、15巻1983、20巻1988、25巻1993
- 2) 國學院大學スポーツ・身体文化研究室：國學院大學スポーツ・身体文化小史・國學院大學スポーツ・身体文化研究室紀要：第30巻1998
- 3) 國學院大學体育研究室・國學院大學スポーツ・身体文化研究室編：國學院大學体育研究室・國學院大學スポーツ要項・年次報告：1971(昭和46年)～2010(平成22年)
- 4) 厚生統計協会：国民衛生の動向：1971
- 5) 鳥海 順・田中 照二・永山 和男編集：病態と治療：杏林書院・2005

(えびさわいじ・國學院大學人間開発学部健康体育学科教授、  
いとうひでゆき・同学科助手)